様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年６月１５日現在

機関番号：２４５０５
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：２１５９２７１２
研究課題名（和文）　現象学的看護研究の方法論の確立

研究課題名（英文）　Foundation of the Methodology of Phenomenological Nursing Research

研究代表者
松葉　祥一（MATSUBA SHOICHI）
神戸市看護大学・看護学部・教授
研究者番号：00295768

研究成果の概要（和文）：
本研究では、現象学研究者と看護学研究者が協力して、現象学的看護研究の方法論の確立を目指した。具体的には、国内外の現象学的看護研究の実践者と討議を行い、それに基づいて大学院生・研究者向けのテキストを分担執筆し、このテキストを使って院生を指導することによって評価を行った。この結果、看護の研究者にとって使いやすいと同時に現象学的に一貫している現象学的看護研究の方法を明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：
This research tried to establish the methodology of phenomenological nursing research, cooperating phenomenology researchers and nursing science researchers. We have discussed with the researchers practicing the phenomenological nursing research in Japan and abroad, wrote the textbook for the postgraduate students based on this discussion, and evaluated it with postgraduate students. As a result, we have been able to clarify the method of phenomenological nursing research easier to use for nursing researchers at the same time consistent from the view pointof phenomenology.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	1,600,000	480,000	2,080,000
２０１０年度	1,200,000	360,000	1,560,000
２０１１年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	3,600,000	1,080,000	4,660,000

研究分野：看護学
科研費の分科・細目：基礎看護学
キーワード：現象学、解釈学、教育、質的研究、研究方法

１．研究開始当初の背景

看護学における現象学的研究は、当初、すでに確立されていたAmedio GiorgiやMax Van Manen ら心理学の研究方法を導入する形で行われた。その後 Duquesne 大学や Northwestern 大学などの現象学者たちとの共同作業によって方法論を確立していった。とくに P.Benner らは解釈学的現象学研究の方法論を確立するとともに、これに基づく研究を活発に発表し続けている。この方法は全世界で採用され、現在ではカナダやイギリス、オーストラリア、スウェーデン、韓国などで新たな研究動向が生まれている。

日本でも、現象学的看護研究の意義を説く

論文や研究書、雑誌特集号は少なからず存在する。しかし、現象学的看護研究の方法について説明したテクストはあるとしても、そのほとんどが質的研究方法の一つとして簡単に説明したものにすぎない。これは、現象学的研究方法が、研究対象によって分析の視点を変えなければならないという性質をもっているからだと考えられる。それゆえ、実際に研究者が現象学的方法を採用しようとしても、インタヴューを行って逐語録を読解するところまではできるものの、そこからどのように分析を進めるかがわからないという事態が生じることになる。また、方法論が確立していないことが、「現象学的研究は主観的な印象を述べたものにすぎない」という誤解を受ける原因の一つになっていると思われる。

２．研究の目的

米国の看護研究者たちの多くは、基本的には、還元と本質直観を基盤とする現象学的心理学の方法を踏襲している。他方で、P. Benner らは、ハイデガーの解釈学的現象学に基盤を置き、人類学的な文化相対主義の視点を導入することによって、新たな方法を確立するに至った。両者とも、自然的態度を括弧入れすることによって、真の経験の意味を明らかにしようとする点では同じである。しかし、解釈結果の究極的な意味づけを本質直観に置くか、解釈の更新に置くかによって、解釈結果をどこまで開かれたものと考えるかの差異が生じる。本研究では、まずこの両者の立場、およびそこから生じる方法論上の差異に注目して、いずれの方法論がより日本の現状に採用しやすいかを、実際の看護研究やその指導に携わっている看護研究者と現象学者の共同討議によって明らかにする。

次に、看護研究者が実践しやすく、また指導しやすい方法、それとともに現象学的な原理と矛盾しない方法を具体的に明らかにする。すなわち、問題設定、文献検討、インタヴュー、分析、公表の各段階にわたって検討する。なかでもとくに分析方法に注目したい。現象学研究の場合、他の質的研究のようにコード化やラベリングといった具体的な方法上の指示がなく、本質直観という指示しかない。現象学的研究が難しいといわれる原因の一つは、ここにあると思われる。しかし、現象学研究やその指導にあったっていると、ある程度注目すべき点がしぼられてくるように思われる。例えば P. Benner は、1) 状況 (Situation)。2) 身体化 (Embodiment)。3) 時間性(Temporality)。4) 関心事 (Concerns)。5) 共通の意味 (Common meanings) に注目することを勧めている。しかし、この指標は、言語や文化的背景の違いのせいで、日本ではそのまま使うことができない。これを参考にしながら、日本の現状にあった、初学者でも理解しやすい具体的な指針を明らかにしたい。

今回の研究の特色は、現象学者と看護研究者が共同作業を行う点である。それによって、第一に、現象学的に一貫した方法論を明らかにすることができ、それをもとにより具体的な手続きを提示することが可能になると思われる。例えば、現象学的看護研究の解説書のなかでは、しばしば次のような誤解に出会う。現象学ではいっさいの先入見を括弧に入れなければならないので、先行研究の文献調査はいっさい行ってはならない。あるいは、研究協力者が研究者の解釈を示した解釈を訂正したり否定したりした場合は、それをすべて受け入れなければならない。こうした誤解を招くのは、現象学者が、還元 (括弧入れ) と本質直観を指示するだけで、細部については何も示していないからだと思われる。看護研究の実践過程を細部にわたって検討することによって、本来現象学の立場から必要不可欠な手続きと、そうでない手続きとに分けることができる。こうした選別作業によって、より理論的一貫性の高い方法論を仕上げることができるであろう。とりわけ、今回参加する現象学者たちは、全員看護や障害児教育、心理療法などのケアについて共同研究の経験があり、効果が期待できる。

３．研究の方法

次の三つの方法で研究を行う。(1)国内外の現象学的看護研究の実践者を招いて共同討議を行う。(2)この結果に基づいて、現象学的看護研究の方法論のテキストを分担執筆し、その原稿を共同で検討する。(3)現象学的研究を行っている大学院生や研究者と共同研究を実施することによって(2)の方法論の評価を行う。

(1)まず、国内外で現象学研究を実践している看護研究者や、心理学者、社会学者を招聘し、方法論上の共同討議を行う。また、海外での質的研究や現象学的看護研究に関わる学会、研究会、ワークショップ等に参加するために、イギリス、スウェーデン、フランス、韓国での調査を行う

(2)この共同研究と平行して、大学院生や研究者向けのテクストを分担執筆し、執筆分を全体で討議する。以下はその目次である。この内容は共同討議を経て変更が加えられる予定である。

I.理論編

1)導入 1――現象学とは何か。現象学的方法とは何か。

2)導入 2――なぜ看護研究に現象学が使われるようになったのか。自然科学の限界。

3)歴史１――フッサール、ハイデガーからサルトル、メルロ＝ポンティへ。社会学、精神

医学、心理学に導入された歴史。研究の現状。
4)歴史 2――アメリカにおいて心理学・社会学を経由して看護界に導入された歴史。アメリカおよび日本における現象学的看護研究の現状。
5)方法 1――還元と直観、解釈学
6)方法 2――量的研究方法と質的研究方法の相補性、質的研究方法の中での現象学的研究の位置
7)研究成果 1――フッサールの志向性と間主観性、メルロ＝ポンティの知覚と身体、ハイデガーの存在論と解釈学
8)研究成果 2――現象学的看護研究者の代表的な議論、ベナーのエキスパートナース論ほか
II.実践編
1)導入
2)問題設定（文献検討）
3)研究（インタヴュー）
4)分析
5)公表
III.演習編
1)記述――例えば暗闇のなかを歩いてみて、その経験を記述してみる
2)分析――例となるインタヴューの逐語録を分析してみる

４．研究成果

(1)国内外の現象学的看護研究の実践者を招いて共同討議を行った。研究会には共同研究者だけでなく、広く参加者を募り、回を重ねる毎に参加者が増えた。

第 1 回研究会、2009 年 4 月 25 日、大阪大学で開催（以下、研究会の開催場所はすべて大阪大学）。西村ユミ「現象学的看護研究の現状」、松葉祥一「現象学的看護研究の可能性と問題点」。第 2 回研究会、2009 年 9 月 6 日、村上靖彦「『自閉症の現象学』と方法としての現象学」、グレッグ美鈴「他の研究方法と比較した場合の現象学的看護研究の位置」、第 3 回研究会、2010 年 1 月 10 日、浜渦辰二(大阪大学)「ケアの現象学のために」、大久保功子（東京医科歯科大学）「現象学と看護と研究」。第 4 回研究会、2010 年 4 月 24・25 日、科研費研究「ケアの現象学の基礎と展開」（代表：榊原哲也）と共催、福田俊子（聖隷クリストファー大学）、松葉祥一、榊原哲也（東京大学）、河野哲也の報告。第 5 回研究会、20010 年 7 月 25 日、西村ユミによるグレッグ美鈴への公開インタビューを行い、現象学的方法に基づくインタビューの方法について討議。第 6 回研究会、2010 年 10 月 24 日、高橋照子（西武文理大）および前回のインタビューの解釈について検討。第 7 回研究会、2011 年 1 月 22 日、稲原美苗（ハル大学）。第 8 回研究会、2011 年 8 月 11 日、「ケアの現象学の基礎と展開」との共同研究会。塩飽耕規（京都大学大学院）「患者のニーズから看護師のニーズへ」の発表の他、『看護研究』特集「現象学的研究における「方法」を問う」に掲載された 7 つの論文の執筆者が集まり合評会。発表は、本間直樹（大阪大学）、西村高宏（東北文化学園大学）、大村佳代子（大阪大学）。

他に、2009 年 8 月には松葉が渡欧し、パリで開かれた現象学会での討議に参加、ヨーロッパにおける現象学的看護研究の現状について調査。また、2009 年 11 月には、来日中のパトリシア・ベナー（カリフォルニア大学）に松葉とグレッグが解釈学的研究方法についてインタヴューを行い、翻訳した。2010 年 11 月 2 日には、立命館大学において、ジョナサン・コール（プール病院臨床神経生理学科医長）の講演会を共催で開催した。2010 年 5 月には松葉が渡欧し、クラクフ（ポーランド）で開かれた現象学会で討議に参加、ヨーロッパにおける現象学的看護研究の現状について調査した。また、2010 年 8 月には松葉と三浦が、西武文理大学で開かれた A・ジオルジによる現象学研究方法ワークショップに参加した。他にも、国内の関係学会に参加して、討議を行った。とくに 2011 年 9 月 17 日(土)神戸市看護大学でメルロ＝ポンティ・サークルとの共催で「メルロ＝ポンティと看護」というシンポジウムを行った。

(2)以上の成果にもとづいて、現象学的研究の方法論のテクストの執筆を行い、毎回研究会のたびに、原稿の検討を行った。現在、最終校正の段階に入っている。

(3) 2011 年度は、現象学的研究を行っている大学院生を招いて、疑問点や問題点を討議することによって、(2)の方法論の評価を行った。第 9 回研究会、2011 年 10 月 2 日、滝川由香里（長崎大学）「開業助産師に妊娠期ケアを受けて出産した女性の妊娠期の経験―経験そのものを理解するとは」、片山康（大阪大学）「現象学的看護研究法を学習している過程から実感したこと―研究計画からインタビューの実施まで」、菊池麻由美（東京女子医科大学）「筋ジストロフィー病棟看護師の臨床状況に対する構えの構造―現象学的研究を進めるにあたって困ったこと」で、現象学的看護研究を行っている 3 名に、研究の概要と現在何に困難を感じているのかについて話していただき、それにもとづいて討議した。第 10 回研究会、2012 年 1 月 8 日、田多佳子（東京医療保健大学）「ケアの場における患者にとっての「気持ちいい」体験－研究計画から分析における困難について」、および矢ヶ崎香（慶應義塾大学）「現象学的研究に関する困難さと課題」に基づいて議論を行った。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計８件）
①松葉祥一、開かれた現象学的看護研究方法、看護研究、査読無、44 巻、2011、17-26
②西村ユミ、質的研究のプロセス――現象学的研究を中心に、和歌山県立大学医科大学保健看護学会誌、査読無、2011、13-16
③西村ユミ、看護ケアの実践知：「うまくできない」実践の語りが示すもの、看護研究、査読無、44 巻、2011、49-62
④西村ユミ、痛みの理解はいかに実践されるか―急性期看護場面の現象学的記述、看護研究、査読無、44 巻、2011、63-75
⑤グレッグ美鈴、Newly Licensed Nurses' Experience in Rotational Program in Japan、The Journal of Continuing Education in Nursing、査読有、42 巻、2011、89-96
⑥村上靖彦、看護行為の時間：西村ユミとハイデガー行為論の拡張、看護研究、44 巻、2011、141-158
⑦松葉祥一、メルロ＝ポンティのアクチュアリテ、KAWADE 道の手帖メルロ＝ポンティ、査読無、2011、90-95
⑧松葉祥一、Possibilité de la《 communauté charnelle 》、Chiasmi international、査読有、11、2011、56-68
〔学会発表〕（計１件）
①西村ユミ、現象学的研究の普遍性について、日本看護研究学術集会（招待講演）、2011 年 8 月 8 日、横浜
〔図書〕（計３件）
①村上靖彦、青土社、傷と再生の現象学、2011、302
②村上靖彦、講談社、治癒の現象学、2011、202
③松葉祥一、青土社、哲学的なものと政治的なもの：開かれた現象学のために、2010、331

〔その他〕
ホームページ等
http://nursephenomenology.blog72.fc2.com/

６．研究組織
(1)研究代表者
松葉　祥一（MATSUBA SHOICHI）
神戸市看護大学看護学部･教授
研究者番号：00295768

(2)研究分担者
グレッグ　美鈴（GREGG MISUZU）
神戸市看護大学看護学部･教授
研究者番号：60326105

西村ユミ（NISHIMURA YUMI）
大阪大学･コミュニケーションデザインセンター・准教授
研究者番号：00257271
本間　直樹（HOMMA NAOKI）
大阪大学･コミュニケーションデザインセンター・准教授
研究者番号：90326105
三浦　藍（MIURA AI）
神戸市看護大学看護学部･助教
研究者番号：10438252
(3)連携研究者
河野　哲也（KONO TETSUYA）
立教大学・教育学部・教授
研究者番号：60384715
村上　靖彦（MURAKAMI YASUHIKO）
大阪大学・人間科学部･准教授
研究者番号：30328679
亀井　大輔（KAMEI DAISUKE）
立命館大学・文学部・助教
研究者番号：80469098